

教員養成学科における 「教科専門科目・音楽」改善の試み

— 小学校教員養成課程必修科目に関する97年度実践報告 —

中地雅之*, 小笠原勇美*, 林芳輝*, 今関由紀子*,
光井安子*, 佐々木正利*, 高橋良学**

(1998年1月7日受理)

Masayuki NAKAJI, Isami OGASAWARA, Yoshiteru HAYASHI, Yukiko IMAZEKI,
Yasuko MITSUI, Masatoshi SASAKI und Yoshinori TAKAHASHI

Eine Reformationsversuch des Unterrichtsfachs
“Einführung in die Schulmusik”

— Ein Bericht über Praxis in Lehrerausbildung Studienjahr 97/98 —

序

本稿は、岩手大学教育学部音楽科が97年度に試みた、小学校教員養成課程必修科目「教科専門・音楽」(小専音楽、音楽概論)¹⁾の改善に関する実践記録である。

教員職員免許法の改訂によって1990年より必修となった、小学校教員養成課程の「教科専門科目・音楽」に関しては、既に実践における多様な問題点が指摘されている。要求される内容の多様性に対する、時間数の不足、指導者数の不足、学生の音楽経験・知識の不均衡等々、音楽技能の持つ特殊性から生ずる困難さは、降矢美彌子氏が指摘するように「他の教科と同列に論ずることができない側面を持っている」²⁾。下条隆司氏らのアンケート調査においては、現職小学校教諭が教育実践において最も指導に困難に感じている教科は音楽で、その理由として「指導方法が十分でない」「指導内容についての知識が十分でない」があげられている³⁾。さらに、ピアノを含めた音楽実技は、教育実践に要求されるのみならず、教員採用試験の内容にも含まれており、大学における基礎教育の充実が求められる。以上より、教員養成における「小専音楽」の内容は、自己評価による改善の試行が必要とされる。「小専音楽」や方法は、各大学における教官構成・歴史的背景・カリキュラム計画・設備等、各大学の置かれた実情に応じて異なっており、内容改善のためには諸大学の実践に関する情報交換が不可欠であろう⁴⁾。以下、97年度岩手大学教育学部音楽科の実践を、

全体構想と実践記録の2章に分けて報告を進める。

I 全体構想

本章では、実践を規定する全体的枠組みを中心に改善の内容を概観したい。基本方針・領域構成・指導体制・指導内容・教材機器の5点から、全体構想を説明する。

1. 基本方針

「小専音楽」の指導実践にあたり岩手大学教育学部音楽科は、以下の3点を基本方針として設定した。

- 基本方針① 音楽科専任教員全員の参与
- 基本方針② 教員の専門性を生かした指導体制の構築
- 基本方針③ 音楽科教育に関する基礎指導内容の再編成

基本方針①は、当科における従来の方針を引き継いだものである。これはML（ミュージックラボラトリー）を所有していない本学部の実情から、個別指導を中心とするピアノ基礎技能の実践に対して必要な措置であった。しかし、教育学部音楽科における教員構成をより効果的に教員養成教育に反映させるために、さらに基本方針②を設定した。当科では従来、一名の教員が受講者全体に声楽を、また各教員が同数の学生にピアノ個別指導を行っていた。しかし、声楽・理論系の教員はその専門性を生かした内容を指導する方が、教員養成教育にとってより有効であると考えられる。なぜなら、音楽科教育においては声楽・理論等に関する技能・知識も、教育法理解や教育実践の基礎として必要とされており、その全てを教育法で取り上げることは時間的に困難だからである。この方針②に従い、領域構成・指導体制の大幅な改編を行なった。また、音楽科教育に関する基礎としての指導内容を再考するために基本方針③を設定した。

次節より、上述の基本方針を受けた領域構成・指導体制・指導内容・教材機器に関して、その詳細を報告したい。

2. 領域構成

以上の基本方針により、97年度は次の2科目4領域を設定した。

科目	領域	受講者数	開講時数	指導者数	指導形態	単位
A	声楽 理論	70名	2コマ	声楽各コマ1名	一斉	1 半期
				理論2~3名(チームティーチング)		
B	ピアノ 簡易伴奏	55名	2コマ	ピアノ5~6名(院生アシスタント)	個別、ペア グループ	1 半期
		30名	1コマ	簡易伴奏1名(学生アシスタント)		

表1 岩手大学教育学部小学校教員養成課程「教科専門科目・音楽」科目一覧

本学部小学校課程の学生は、科目AとB（カリキュラム上の科目名はⅡ類器楽とⅡ類声楽）各1単位、及び音楽科教育法（小）2単位、計4単位を音楽に関する教科専門の必修科目（小専科目）として履修する。教科専門科目であるA・Bは、それぞれ90分の演習であり、その内容はさらに声楽・理論、ピアノ・簡易伴奏の4領域に区分される。

科目Aでは、毎週声楽と理論の一斉指導が、70名の大グループで45分間ずつ計90分間行なわれる。科目Bでは90分の講義時間内に、ピアノの個別指導（またはペアレッスン）が毎週10分程度、また隔週でコードネーム伴奏法の指導が25名程度の中グループによって行なわれる。この領域構成では、基本方針③にならない従来の内容に基礎理論（楽典）とコードネーム伴奏法とが新たに加わることになった⁵⁾。

3. 指導体制

以上の各領域における指導を実現させるため、次のような体制を新たに導入した。

- 指導体制① 各教官の専門に応じた指導体制
- 指導体制② 多様な学習形態による指導（大・中・小グループ、ペア・個別指導）
- 指導体制③ 音楽学習経験によるグループ編成
- 指導体制④ 音楽科学生・院生の指導力活用（チームティーチング、ティーチングアシスタント）

指導体制①は、基本方針②を受けたものである。これによって、一律に各教官がピアノ指導を行なう従来の体制が改編された。即ち、「声楽」を声楽の2教官が、「理論」を作曲・音楽学・音楽科教育の2～3教官が、「コードネーム伴奏法」を音楽科教育の教官が、「ピアノ」は非常勤講師を含めた4～6名の教官が指導に当たることとなった。

指導体制②は、各領域によって学習形態の編成を改善したものである。声楽と理論は学習者の楽器使用がないため大グループでの一斉指導が可能だが、器楽指導は楽器によって学習者の人数が限定される。よって、ピアノは1～3名による指導を、簡易伴奏は電子キーボードを活用し25名程度の中グループによる指導を行なった。ピアノ学習経験者は、逆にピアノ指導を10名程度の小グループで、またコードネーム伴奏を2～4名で行なっている⁶⁾。

指導体制③は、前項にもあったピアノ学習経験者と初学者を分離する指導方法である。音楽教室等でピアノ演奏の初歩を既に習得している学生は、教本終了以上の楽曲の自己学習が可能のため、指導を隔週で集中して行ないより高度な演奏能力の育成を図った。グループ分けは、指導開始前の予備調査（アンケート）によって行ない、ピアノ専任教官が指導に当たった。

指導体制④は、今回の改善で最も特徴的なもので、音楽科学生・院生の指導力として活用する方法である。従来音楽科所属学生の基礎技能単位には、音楽科におけるピアノの単位が振替えられていた。97年度より新たに、簡易伴奏法における〈指導補佐〉によって単位を認める措置を導入した。これは、音楽科学生の単位取得の便宜を図ると同時に、音楽科生の教育実践力育成につながり、さらに受講者の個別指導の時間も保障される。大学院生（短期大学教官等の社会人を含む）は、大学院講義科目「音楽教育指導論Ⅰ」における鍵盤楽器指導論の実践として、教官とのチームティーチングによる数学生数名の指導を

行なう。指導論Ⅰを終えた大学院生は、希望によってその後ティーチングアシスタントとして指導に加わることになる⁷⁾。

以上4つの指導体制の導入により、新領域と学生の音楽経験の多様性に対応する措置をとった。

4. 指導内容

各領域の指導内容は、概論・基礎技能という性格上、音楽科教育に関する基礎理論・技能を基本に考えた。この基礎力を、吉田章宏氏等の提案する教員養成教育における実力を参考⁸⁾に、以下の3つの視点から分析的に考察したい。

- 視点① 教師として成長するための基礎力
- 視点② 音楽科教育の授業実践を行なうための基礎力
- 視点③ 教員採用試験準備のための基礎力

90分授業半期2枠の必修概論科目で、これらの諸実力を全学生に十分獲得させることは現状では不可能である。よって、個々の学生が将来各種能力を發展させることができる、共通の基礎的内容(①∩②∩③)を、基礎技能科目のミニマムエッセンシャルズとして指定した。言い換えればⅡ類器楽・声楽では、小学校音楽科教育に関する①学生の発動的学習②教育的実践力③教員採用試験準備の前提となる、基礎的な知識・技能をその指導内容として考えた。以上を簡略化して図示すれば、凡そ次のように表せるであろう。

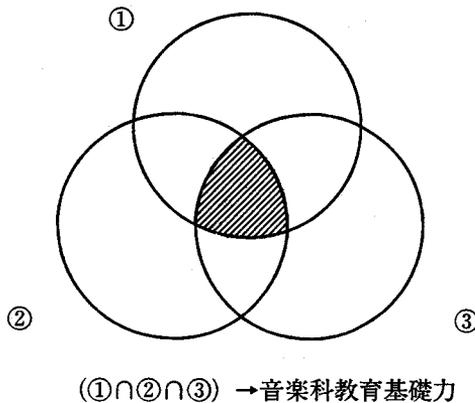


図1 小専音楽科目のミニマムエッセンシャルズ概念図

上述の基礎力として、各領域において以下の内容を取り上げた。

- 基礎内容① 五線譜読解の基礎と音階・音程・和音の基礎知識 (理論)
- 基礎内容② 呼吸・発声法・階名唱法に関する基礎技能・知識 (声楽)

基礎内容③	鍵盤楽器演奏法に関する基礎技能・知識	(ピアノ)
基礎内容④	コードネーム伴奏法の基礎技能・知識	(簡易伴奏)

各領域ごとの詳細な内容は、Ⅱ実践記録編の各資料にまとめてあるので⁹⁾、ここでは各領域に共通する指導内容に関する観点を、上述の3視点からさらに省察したい。

視点①の教師として成長する力の育成から、各領域に於いては学生の自己学習の前提となる、基礎知識・技能が達成目標として設定されている。この視点①には、さらに将来教師になる学生が音楽科教育を積極的に考えようとする内的動機の誘発が必要とされる。このためには、「小専音楽」の受講を通じて、音楽や音楽表現に関する興味・意味・方法を学生が実感することがひとつの前提となるだろう。また半年でピアノ教本を終えるという厳しい条件から、学生の自己学習力・問題解決能力が不可欠となり、その育成も視点①に通ずる内容として認められるだろう。

視点②教育実践力においては、小学校の教材楽曲を声楽と簡易伴奏に積極的に導入し、実践への基礎を指向した。また、コードネーム伴奏法や自動伴奏機能の理解は、授業実践における歌唱活動の伴奏を想定したものである。

また視点③教員採用試験準備への基礎としても通用するよう、岩手県（高学年教材の弾き歌い）、福島県・秋田県（バイエルピアノ教本）、北海道（共通教材の簡易伴奏）等の実技試験と音楽筆記試験に対応できる基礎内容を含めるよう配慮した。

5. 教材機器

指導内容・体制の改善に伴い、以下の教材・機器を導入した。

教材機器①	歌曲・童謡・唱歌・ポップスの教材化
教材機器②	電子キーボードの購入・活用
教材機器③	コンピュータ補助教材の作成

各領域における楽曲教材の詳細については、次章の実践記録編に集約したので、ここでは教材全体の傾向に関する展望を与えたい。

前節の視点②との関連で触れたが、教育実践と学生の興味における音楽様式の多様化を考慮し、声楽・簡易伴奏においては積極的に、またピアノ・理論においては部分的に歌曲・童謡・唱歌・ポップスを教材として取り入れた（教材機器①）。

前節の視点①との関連も含め、学生の自己学習を促すために各科に配布されている学生用コンピュータで操作可能な教材ソフトを準備した。現在本学図書館のマッキントッシュに、コードの理論に関するインターネット上のフリーウェア、ピアノ教本の範奏を収録したオリジナルソフトの2種を用意している¹⁰⁾。これらは、ネットワークを通じて学内の各端末や教育実践指導センターのコンピュータスタジオでのダウンロードが可能である。講義開始時に、全受講者に使用法を説明しコンピュータスタジオで実習を行なった（教材機器②）。

また、本学部にはML（ミュージックラボラトリー）が設置されておらず、鍵盤楽器の

グループ指導を可能にするために、電子キーボード20台とヘッドフォンを購入した。初学者の簡易伴奏法は、主としてこの電子キーボードを用いて行なう。親機によるコントロール機能がないため、指導体制②で述べたように音楽科学生の指導補助を導入した。これと関連して、自動伴奏機能・デジタル音源による音色選択、進行状況に応じて合奏等の実習も合わせて行なっている。また、前項の視点②との関連から同機種の電子キーボード6台を附属小学校に整備し、教育実習での活用を可能にした(教材機器③)。各教材機器工夫の詳細は、次章にまとめた。

以上、基本方針・領域構成・指導体制・指導内容・教材機器の5点から、「教科専門科目・音楽」の全体構想を概観した。次章では、各領域ごとにその内容を実践記録という形で報告したい。

(第1章担当：中地雅之)

II 実践記録

本章では、本学部「教科専門科目・音楽」の4領域における'97年度実践の内容・教材・方法等をより詳細に報告する。以下、声楽・理論・ピアノ・簡易伴奏の順に、実践記録を集約する。

1. 声楽

声楽は毎週45分間ずつ実施される。理論45分と合わせて半期に週2枠開講され、声楽の教官2名がそれぞれ1グループを担当する。受講人数は上限70名で、2～3年次学生が主に履修する。声楽を、45分ずつ毎週行なう理由は、声楽練習の一般的な時間的制約と、技能習得に必要な定期的な反復練習を確保するためである。主たる内容は、小学校音楽科教育の指導内容の基礎となる、姿勢・呼吸・発声・階名唱・歌唱教材表現法の理解と実践である。使用教材は、教官によって異なるが、小学校共通教材との関連を図り、滝廉太郎・シューベルト等の歌曲を含んでいる。以下、各グループの指導内容を提示する。

Aグループ

目的：歌う喜びの体験と、それを児童に伝達するための基本的歌唱力の育成。

教材：テキスト [新編] 音楽科教育法 (1994年, 音楽之友社)

第1回 発声原理の理解と基礎的練習

- ・声の仕組みに関する、発声器官と全身の筋肉のメカニズムからの説明
- ・様々な運動練習を用いた足先から頭頂迄の自然な姿勢の形成
- ・胸隔を保ち、背筋・腹筋・臀筋を使った呼吸練習
- ・s (無声), z (声帯振動を伴う) を用いた1～2度音程での発声練習
- ・楽曲の歌唱 (グリーンズリーブス, 星の世界, オーラリー等, 既知の旋律)

第2回～ 基礎練習の反復と発展

- ・第1回の基礎練習に習熟させ、他の練習を加えていく
- ・横隔膜の開きと弾力を強めるスタッカート練習
- ・共鳴と発音の基礎練習としての顔面（表情筋）、舌、唇等の体操
- ・s, zの子音にu, i, e, o, aの母音を加える
- ・発声練習の音程拡張（2度, 3度～と徐々に広げる）
- ・歌詞の朗読（日本語ディクテーションの基礎）
- ・テキスト教材を用いたソルフェージュ（音程, リズム）練習
- ・教材を用いた階名唱（移動ド唱）の練習。聴唱から視唱へ、#b2位の調まで。
- ・主たる教材楽曲

グリーンスリーブス、星の世界、オーラリー、エーデルワイス、マイウエイ
河は呼んでいる、楽に寄す（シューベルト）、花、荒城の月（滝廉太郎）等

最終回 試験

- ・2～3人のグループを作り、二重唱または三重唱を行なう。事情によって、独唱も認める。

Bグループ

目的：音声生理学的な見地から発声の基本原則を理解し基礎練習を行なう。

さらに、小中学校における歌唱教材の歌唱法・指導法について理解する。

第1～3回 歌唱と発声の基礎理論

- ・学校教育における歌唱教育の重要性（授業、諸活動、行事）
- ・歌唱における、発声法の開発訓練の必要性（多様な発声法、児童の発達）
- ・音声生理学からみた発声の3要素（呼吸、声帯振動、共鳴）

第4～7回 発声法の基礎実践

- ・呼吸法実践（自然体＝歌唱姿勢、各種呼吸筋の独立運動練習）
- ・声帯振動法実践（息, z音, za音, 声帯振動における他動性の理解）
- ・共鳴法実践（共鳴と喉頭や咽頭形状の相関性理解、頭声や胸声の共鳴法開拓）
- ・母音による共鳴相違の自覚
- ・会話発声と声楽発声の特性と相違の理解
- ・歌詞の解釈、ディクテーション、発音法の実践

第8回～ 各種様式による歌唱実践

- ・小学校低学年の歌唱共通教材の歌唱実践（うみ、春がきた、ふじ山等）
- ・小学校中高学年の歌唱共通教材の歌唱実践（もみじ、こいのぼり、おほろ月夜等）
- ・中学校歌唱教材の歌唱実践（滝廉太郎、山田耕筰の歌曲、日本古謡等）
- ・芸術歌曲の歌唱実践（ドイツ、イタリア歌曲等）
- ・ハミング、母音唱、歌詞の解釈、曲想表現、アンサンブル等の導入

（声楽担当：Aグループ 今関由紀子、Bグループ 佐々木正利）

2. 理論

声楽終了後引き続き、45分間理論の指導を行なう。声楽の定期的な受講を確保するため、理論科目には不向きだが短時間毎週の受講となる。97年度の担当は、音楽科教育の教官2名と作曲の教官1名で、全体を2～3名で分担した。声楽同様週2コマ開設され、指導順序と内容には全後期で若干の相違がある。内容は、音楽理論・音楽様式・音楽史・コードネーム伴奏・楽典問題（採用試験）の基礎となる、音階と和音の理解を中心においた。

目的：音高系を中心とした音楽基礎理論の理解

音名・階名・音階・調・旋法・音程・和音の概念と歴史的背景

教材：視聴覚教材、各種楽典練習課題

第1回 西洋音楽理論の基本的視点

- ・宇宙に関する音楽の鑑賞（音楽様式の多様性の理解）
- ・宇宙と音楽の調和に関する緒論（ピタゴラス、ポエティウス、ケプラー等）
- ・音響的、数的調和としての音楽理論の理解

第2回 音名、階名と長音階

- ・各国の音名と階名
- ・相対音感と移動ド唱法
- ・長音階とテトラコード、全音と半音（実習課題）

第3～4回 音律と5度圏

- ・古代ギリシャ（ピタゴラス音律）と中国の音階論（3分損益法、自然音階）
- ・純正調と平均律、5度圏と24長短調

第5～6回 各種音程と旋律の移調

- ・旋律の移調法（課題実習）
- ・鍵盤楽器の発達、平均律と転調

第7～9回 和音とコードネーム

- ・基本形と転回形、コードネームの基礎理論、旋律と和音の関係
- ・主要3和音、副3和音、各種3和音（長、短、減、増）、各種7の和音

第10～11回 日本の伝統音階

- ・西洋音階と日本音階の相違（自然音階、7音音階、5音音階）
- ・日本伝統音階の起源（唐時代、平安時代における推移）
- ・基本音階（陰類、陽類、混合類）と各種旋法（3基本音階による15の旋法）

最終回 筆記試験

*適宜、以下の関連楽曲の鑑賞も加えた。

The Sound of Music 「ドレミの歌」、The Westside Story 「プロローグ」

Fantasia 「魔法使いの弟子」等

（理論担当：小笠原勇美、林芳輝、中地雅之）

3. ピアノ

初学者は、毎週10分程度個別あるいはペアレッスンを、また経験者は、隔週で5回程度個別あるいはグループレッスンを受講する。初学者は、基礎教本終了程度を到達目標とし、経験者は各自の演奏力・音楽性のさらなる発展をめざす。指導は非常勤を含むピアノ担当教官4名にその他の教官と大学院生のアシスタントが随時加わる。また小グループ指導においては、同一の楽曲や連弾曲を課題に与え相互学習の効果を図った。週に3枠開講し、経験者と初心者のグループ分けは受講開始時の予備調査によって行なう。

初学者

目的：鍵盤楽器基礎技能の習得（教本達成目標130番，バイエル教本終了程度）

教材：高橋功宜監修「ピアノ教本」（カワイ出版，1989年）

バッハ，モーツァルト，ベートーヴェン，シューマン，チャイコフスキー
バルトーク，カバレフスキー等の小品

ディズニー，ポピュラーソング等の補充教材

コンピュータ教材「Ⅱ類器楽」（稿末の資料参照）

第1回 オリエンテーション（音楽基礎能力の判断）

- ・鍵盤の構造（白鍵，黒鍵，高低），英語音名の理解
- ・姿勢，指番号，ポジションの理解（腕の脱力，手と指の形）
- ・「河は呼んでいる」2種類の演奏
- ・ピアノ教本より数曲の試奏（48，52，54番）

第2回～

- ・受講者の進度に合わせて教本を進める
- ・ハ長調 主要3和音の伴奏型習得（3・4拍子，アルベルティバス，分散和音）
- ・左右各指の独立，及び各種タッチの習得
- ・ポジションの移動，拡張，親指の移動，ハ長調の音階
- ・3度，6度音程，各種和音の演奏
- ・ポリフォニー奏法
- ・フレージングとアーティキュレーションの基礎
- ・イ短調，ト長調，ホ短調，ヘ長調，ニ短調，ニ長調の音階及び楽曲
- ・ペダルの使用，フレージングの基礎，連弾
- ・補充楽曲，自由曲（上記参照）

最終回

- ・弾き歌いの実技テスト
とんび，ドナドナ，大きな古時計，切手のない贈り物（財津和夫），
なごり雪（伊勢正三），少年時代（井上陽水），True Love（藤井フミヤ）等から選曲。

経験者

目的：各自が習得している演奏技能と音楽性をさらに高める。

教材：各自の選択する楽曲（既習曲を含む）、教官の指定する楽曲
これまでに取り上げた楽曲例は、以下のとおり。

〈曲集〉

ピアノ教本より94番以降の練習曲

ソナチネ・アルバムより

ブルグミュラー 25の練習曲より

〈クラシック系〉

バッハ	インベンション, 前奏曲, 主よ人の望みの喜びよ
モーツァルト	ソナタ KV 330, 332,
ベートーヴェン	ソナタ op.49-1, エリーゼのために
メンデルスゾーン	無言歌 (ベニスのゴンドラの歌)
シューマン	ユーゲント・アルバムより, トロイメライ
ショパン	マズルカ op.7-1, ノクターン op.9-1, プレリュード op.28-4,6,7 ワルツ op.64-1等
チャイコフスキー	こどものアルバムより
ドビュッシー	アラベスク第1番
合唱曲伴奏等	大地讃唱, 校歌等

〈ポピュラー系〉

ビートルズ, リチャード・クレイグマン, ジョージ・ウィンストン,
エルトン・ジョン, マイケル・ナイマン, カーペンターズ,
坂本龍一, 布袋寅泰, 山下達郎, ディズニーソング, 映画音楽,
ミュージカルナンバー, クリスマスソング等

試験課題：「夏の思い出」「ベチカ」等歌曲の弾き歌いを課した。

指導内容：正確な読譜の理解を前提とし、学生の技能の実態や楽曲の特徴に即して、次の内容を指導した。

- ・タッチの多様性
- ・フレージング
- ・アーティキュレーション
- ・ペダルと和声の関係
- ・旋律と伴奏のバランス
- ・簡単な楽曲分析
- ・楽曲, 作曲者, 様式の理解等

(ピアノ担当：光井安子, 中地雅之)

4. 簡易伴奏

簡易伴奏は、隔週計5～6回を25名程度のグループで45分ずつ行なう。経験者は、2～3回にまとめ、2～4人で指導を行なう。電子キーボード20台を準備し、ヘッドフォンを使用して活用する。基本的奏法の説明は一斉指導によって行ない、外部スピーカーで音を出しながら確認する。個々の楽曲指導、個人練習においてはヘッドフォンを使用し、音楽科学生の補助を導入する。コードネームの理論は、最低限の内容に留め、詳細は理論の時間に、あるいはコンピュータ補助教材による学生の自習に委ねている。

目的：小学校音楽科教育における、歌唱教材簡易伴奏法の基礎技能習得

教材：吉田孝他「やさしい楽典&ピアノ伴奏」(1990年、音楽之友社)

コンピュータ補助教材 小寺知美「コードのひみつ」(京都教育大学情報音楽専攻)

使用機器：カシオトーン、CTK 630, 650, 680, 601

第1回 ハ長調の伴奏

- ・英語音名、鍵盤の構造、姿勢、指番号
- ・CとG₇の和音
- ・2, 3, 4拍子の伴奏型
- ・電子キーボードの基本操作
- ・「踊ろう楽しいポーレチケ」

第2回 ハ長調、ト長調の伴奏

- ・演奏姿勢の確認、指使いの確認
- ・F, G, D₇の和音
- ・自動伴奏機能
- ・「ふじ山 (C)」 「線路はつづくよどこまでも (G)」

第3回 ト長調、ヘ長調の伴奏

- ・D₇, C₇の和音
- ・分散和音の奏法
- ・「ふるさと (G)」 「山の音楽家 (F)」

第4回 ヘ長調・イ短調の伴奏

- ・B_b, C₇, Am,
- ・主和音、終結部を用いた前奏の工夫
- ・音色の選択
- ・「星の世界 (F)」 「荒城の月 (Am)」

第5回 ホ短調・ニ短調の伴奏

- ・「四季の歌 (Em)」 「カチューシャ (Dm)」

最終回 応用伴奏 (試験、演奏のみ)

- ・「今日の日はさようなら」 「Let it Be」
- ・キーボードアンサンブル (教科書器楽合奏教材、進度の速い学生対象)

(簡易伴奏担当：中地雅之)

総括と展望

以上各領域の実践内容を、個別に見てきた。ここで、各領域の相互関係を総括し、概論科目としての統一性を俯瞰しておきたい(図2)。各領域における技能は、理論と相互に補完し合い、小学校における音楽授業実践の基礎を形成する。これらは同時に、教員として成長していくための、また教員採用試験の基礎的内容となる。

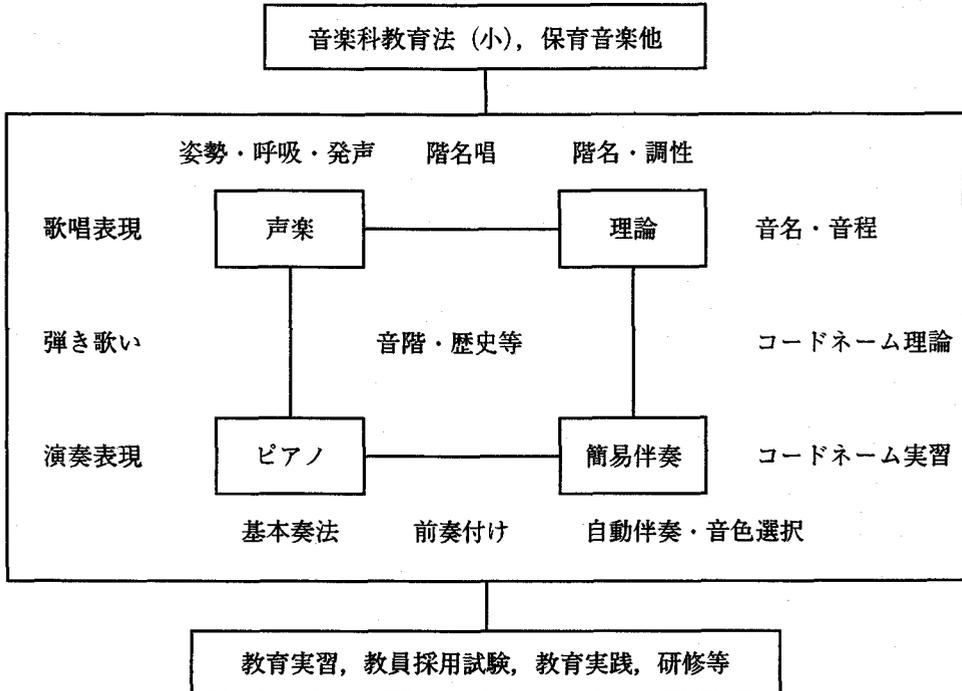


図2 小学校教員養成課程「教科専門科目・音楽」の内容

指導体制においては、教官の専門に応じて指導領域を分担し、学生・院生の指導力を活用し、多様な学習形態を導入した。また教材機器は、電子キーボード、コンピュータ教材、ポップス等を導入して内容の現代化を図り、小学校歌唱教材を活用することによって教育実践との連携を図った。

これらの改善は、各教官の提案をもとに科で全体構想を検討し、各領域の実践においては担当教官の判断に委ねた。96年度の移行期は、体制が複雑なため教官・学生の双方に戸惑いも見られたが、97年度は内容・教材・機器も整備され指導も軌道にのった。今後さらに改善を必要とする課題として、以下の5点があげられる。

課題① 学生の練習環境改善 (練習室への電子ピアノの整備, キーボード貸し出)

- 課題② コンピュータ教材等, 補助教材の拡充
- 課題③ ピアノ教本の改訂
- 課題④ 理論指導内容の再検討 (音楽史, 鑑賞等の強化)
- 課題⑤ 教科教育法・教育実習との連携

本学部音楽科の取り組みに関し, 諸氏からの問題のご批判・ご指摘を待ちたい。

注

1) 岩手大学教育学部では, これに該当する科目に「Ⅱ類声楽」「Ⅱ類器楽」という名称を与えている。Ⅱ類は小学校課程を意味する甲二類の略称で, 本学部音楽科の基礎技能科目のカリキュラムは, 20年来ほぼ同じ形態が踏襲されてきた。本稿で報告するとおり, 96年度の移行期間を経て97年度より音楽文化や音楽教育の現状より即した改革が試みられた。動因となったのは, 常勤教官・非常勤教官の移動, 科目内容・指導体制の問題, 履修方法弾力化のカリキュラム委員会からの要請の3点がその主たるものである。

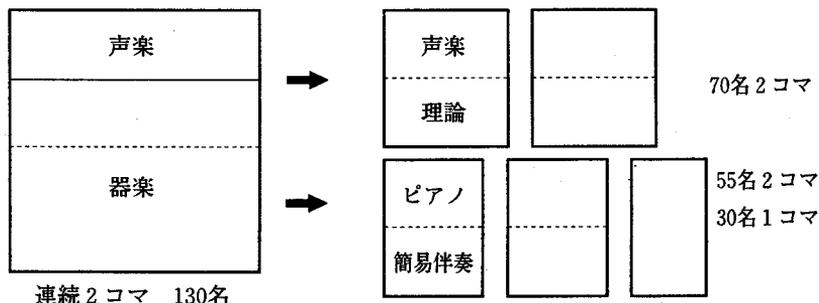
2) 降矢美彌子「〈小専音楽〉の現状と改善の課題」『福島大学教育実践研究紀要』第17号・別冊その1 (1990年, 福島大学教育学部附属教育実践研究指導センター) 14~17頁。ここでは, 日本における音楽教育・文化の問題から, 「小専音楽」の課題が論じられている。

3) 下条隆嗣・平田明雄・福地昭輝「小学校における教科書等の指導の困難さとその理由」『日本教科教育学会誌』第19巻第1号 (1996年) 39~47頁。この調査によれば, 「音楽」の指導上の困難さの原因として, 児童の実態把握・活動や教材の設定・興味や意欲の喚起・評価方法は大きな理由として認められない。ここから, 児童の音楽に対する興味や意欲ではなく, 教師側の指導方法や内容に対する知識の不足が, 困難さの最大の要因であると解釈できる。

4) 竹下英次「教員養成学部における小専科目及び教育実習に関する比較研究 I 小専科目5音楽」『福島大学教育実践研究紀要』第13号・別冊その1 (1988年, 福島大学教育学部附属教育実践研究指導センター) 11~13頁。ここでは, 4教育大学と2総合大学の教員養成系学部における, 「小専音楽」科目の概観が比較されている。しかし, 具体的指導内容等に関しての比較は行なわれていない。

*従来 半期一括連続2コマ履修

*改編後 各半期5コマに分離・分散、履修順序は自由



- 5) 本学部における改編前後の領域構成の変化を図示すると以下のようになる。
- 6) 鍵盤楽器の小グループ指導には、その指導法とグループ編成の難しさの一方で、モデル学習効果・相乗学習効果・時間短縮・アンサンブル導入等の長所があげられる。これらに関しては、稿を改めて取り上げたい。
- 7) 後述する、院生のティーチングアシスタントによる指導では、簡易伴奏も個別指導の際に行なわれる。
- 8) ここで述べる、指導内容に対する分析的視点は、岩手大学教育学部改組特別委員会における教員養成充実検討専門小委員会(委員長:吉田章宏氏, 委員:武田晃司・藤沢建二・吾妻則昭各氏)作成の、「岩手大学教育学部教員養成教育充実案(1997年4月)」を参考にしたものである。当充実案では、教員養成課程において獲得する学生の実力を、(A)教採合格実力(B)成長教師実力(C)卒業資格実力(D)成長専門実力の4視点から分析的に示している。本稿では必修概論科目という性格から(C)(D)を削除し、前掲の下条氏等の調査を参考に「教育実践力」を新たに加えた。言うまでもないが、本来「教育実践力」は浅薄なHow toのみを意味するものではない。この実力は、教材研究・指導計画立案・学級運営・教室でのコミュニケーション等広範な内容を包含し、概論・教育法・演習・教職科目・教育実習・事前事後指導等で総合的に育成されるべき性格のものと考えられる。
- 9) ここで扱われないリコーダー・打楽器類等は、音楽科教育法(小)で演奏実習と指導法を関連させて取り上げられる。
- 10) 京都教育大学情報専攻 (<http://usic.kyokyo-u.ac.jp/education/chord.html>)提供、96年度卒小寺知美氏が作成したフリーウェア「コードのみみつ」。教本用のオリジナルソフトは、岩手大学大学院教育学専攻理科教育講座高橋良学氏の制作。詳細は、稿末の資料を参照。
- 11) 以上の内容は、さらに必修科目である「音楽科教育法(小)」, 選択科目である「保育音楽」「音楽理論」「教育用楽器合奏」「音楽史」等の科目で補充、発展させられる。

付記

本稿中、中地担当の部分は、文部省科学研究費補助金(奨励研究A)「教員養成カリキュラムにおける即興・創作の比較研究」の助成による研究の一部である。

〈資料〉Ⅱ類器楽（ピアノ）コンピュータ補助教材について

教材として使用しているピアノ教本より、41曲の模範演奏と譜例を収録したコンピューター補助教材を作成した。このソフトは、学内ネットワークに接続されている各コンピュータ（Macintosh）でダウンロードでき、各科・教育実践研究指導センター等で試聴できる。楽曲の全体像をつかませ、学生の読譜・個人練習を補助することを目的としている。

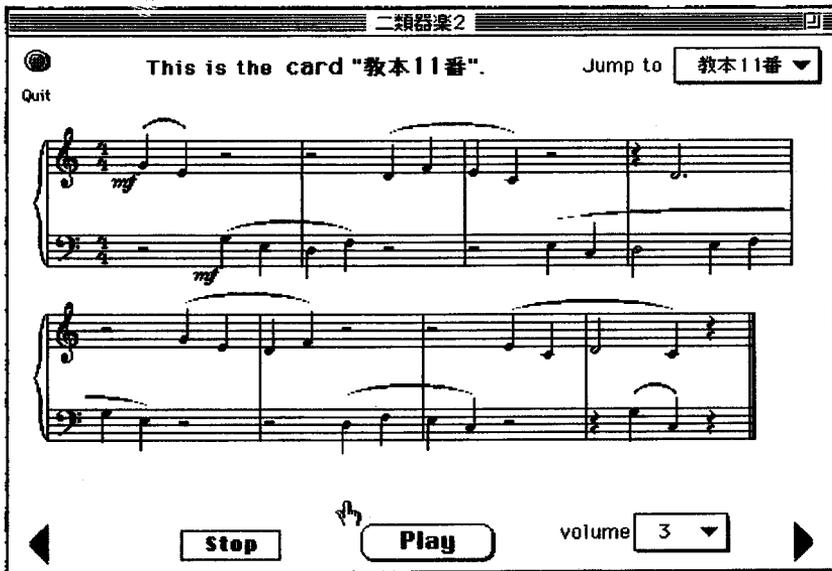
*開発環境 Macintosh Performa588/Power Macintosh 8100/100AV

*使用ソフトウェア

スタック製作：HyperCard2.3J

楽譜：Concertwave 作成した楽譜をハイパーカードに添付した。

録音：SoundEffect 取り込んだ楽曲データをResEditを用いてスタックのリソースに加えた。



ボタンQuitのスク립ト
 on mouseUp
 Domenu Quit HyperCard
 end mouseUp

ボタンJump toのスク립ト
 on mouseUp
 Put the selectedText of bkgnd btn "Jump to" into p
 visual effect dissolve slow
 play "moov"
 Go Card p
 end mouseUp

ボタンVolumeのスク립ト
 on mouseUp
 Put the selected Text of btn "volume" into v
 setVolume v
 play "Harpsichord"
 end mouseUp

(作成：高橋良学)